

巻頭言

編集長就任のご挨拶

近畿大学医学部 皮膚科学教室
主任教授 大塚 篤 司

近畿大学医学会の会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。2023年1月より稲瀬正彦先生の後任として、近畿大学医学雑誌の編集長を拝命いたしました。

編集長就任に際し、私自身の紹介をさせていただきます。2003年に信州大学医学部を卒業し、京都大学医学部附属病院で研修を始めました。その後、島根県立中央病院皮膚科で2年間、外来診療や入院患者の治療、手術を学びました。2006年からは京都大学大学院博士課程で、皮膚免疫とアレルギーの研究手法を学びました。2012年からの2年間はチューリッヒ大学病院皮膚科で、免疫チェックポイント阻害剤の研究に従事しました。その後は、アトピー性皮膚炎をはじめとする皮膚アレルギー疾患や悪性黒色腫（メラノーマ）を専門に、診療と研究を行っています。2021年4月からは、川田暁先生の後任として、現職の近畿大学医学部皮膚科学教室主任教授を務めています。

近年、皮膚科の診療は生物学的製剤や免疫チェックポイント阻害剤の登場により大きく変化しています。これにより、従来治療が困難であった重症のアレルギー疾患が新薬によって治療可能になり、また、従来の抗がん剤が効果を示さなかった悪性黒色腫に対し、免疫チェックポイント阻害剤による完全奏効の症例も増加しています。しかしながら、治療の進歩に伴い、臨床の現場では新たなクリニカルクエスチョンが発生しています。私たちは、これらの課題を丁寧に取り上げ、臨床と研究のトランスレーショナル・リサーチを進めることで解決に向けて努めたいと考えています。また、近畿大学医学雑誌は、このような日常のクリニカルクエスチョンを解決するための論文を歓迎している伝統があると感じています。

近畿大学は、南大阪唯一の大学病院であるため、近隣のクリニックから多くの紹介症例があり、疾患の種類も充実しています。私が専門とする皮膚科の場合、湿疹や白癬、帯状疱疹などの一般的な病気から、尋常性天疱瘡や皮膚悪性腫瘍、重症薬疹まで、多岐にわたる症例を診察しています。また、アトピー性皮膚炎や悪性黒色腫に関しては、全国から患者さんが



多く紹介されている状況です。医学会会員の皆様が施設で経験した貴重な症例も、ぜひ当誌に投稿していただけると幸いです。

近畿大学医学雑誌は、多様なテーマを扱っており、巻頭言では常に新鮮な内容を提供しています。総説については、各分野の専門家によるわかりやすい解説を掲載しています。症例報告については、会員の方々の論文を幅広く募集しています。さらに、コメントリーの形式で読者の皆様の意見や仮説を広く取り上げてまいります。

医師の働き方改革が急務となっています。当科でも、医局員が働きやすい職場環境づくりに取り組み始めました。カンファレンスや回診などの医局の行事は、平日の9時から17時の間に終了するよう配慮し、子育て中の医師が長期間働ける職場を目指しています。近畿大学医学雑誌でも、今後はみなさまの職場の働き方改革などをご紹介できるよう努めてまいります。

近畿大学医学雑誌は、医学会会員の皆様にとって有益な情報を提供し続けることを心掛けております。今後ともご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。